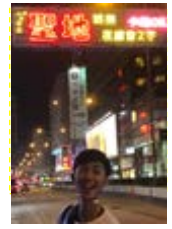


聖地から怪異空間への変遷

— 湯河原しとどの窟を事例として —



AK16042 木庭袋 樹

Keywords

聖地 怪異空間 噂
空間 パワースポット 不気味

1. はじめに

1.1 背景

現在の日本には、聖地やパワースポットなど、様々な神秘を体験できる場所が多く存在する。多くの人がそこへわざわざ出向き、神秘を感じ、また人によっては運氣やパワーなどをもらうだけではなく、邪気や災いから身を守ろうとする。そうした場所には、縁結びで有名な出雲大社や学業成就を祈願する湯島天神など昔からなじみのある場所や、平成7年に元極学という中国政府が公認する気の研究団体の創始者で、著名な気功師の張志祥氏と日本の研究機関が発見したというゼロ地場の分杭峠などの比較的新しい場所も含まれている。

人間が感じる神秘とは、人知が及ぶことのない圧倒的な何かであり、それらは認識や理論では語れないとされている。またそのような場所を聖域と呼ぶ。「宗教上、信仰上の理由でむやみに近づいたり、けがしたりすることが禁止され、別格の扱いを受ける様子」(広辞苑)と定義されている。一方、認識や理論では語れないものには昔から妖怪、幽霊、呪い、祟りなどがある。それらは人間とともに存在しながらも、普段は可視化されない闇としての役割を担っている。それらの出現する場所もまた、理論や認識だけでは語り尽くせない。心霊スポットに度胸試しとして行く「肝試し」は平安時代から存在するように、一般的には疎まれ、避けられている空間だが、人の好奇心の対象であり続けるという逆説的な状況にある。

1.2 研究目的

今回研究対象とする湯河原しとどの窟は源頼朝にゆかりある場所でもあり、山岳信仰や民間の地藏信仰、観音信仰の聖地であった歴史がありながら、現在は心霊スポットとして、インターネット上で怪異の噂が流布されている現状にある。聖地では奇跡などのポジティブなものを訪れた人に与えるのに対し、心霊スポットでは呪い、祟り、などネガティブなものを訪れた人に与える。同じ空間であるのにも関わらず現象が真逆に変わっている。ここでは、心霊スポットを怪異空間と呼ぶ。これらの状況より、本研究の目的は聖域と怪異空間は同じ根源を持ちながらも、その根源的意味を具現化する事物があると

きには可視化され、他から聖別化される一方で、具体的事物を持たないときには不可視のままであり、神話化、伝説化、あるいは排除されるという仮説を立て、それを実証していくこととする。聖域や怪異空間の特徴を物質的、空間的に解き明かし、聖地が怪異空間へ変わっていく原因やその変遷の過程を解き明かすことを目的とする。

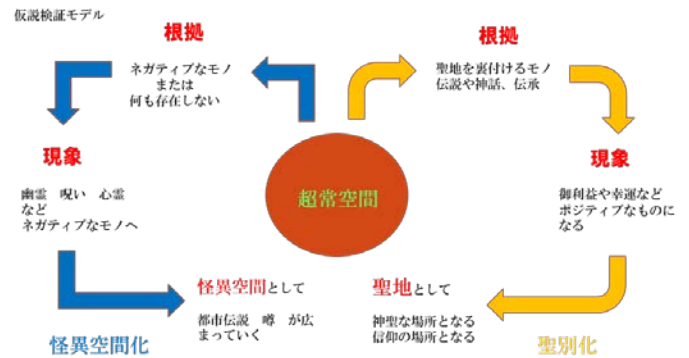


図1 聖地と怪異空間で起こる現象の仮説

1.3 調査方法

調査方法は、根拠と空間という2つの視点から対象とする場所を分析する。前者は話やその場所の成り立ちに関するハナシについて考える。神社や寺などで語られる説話、神話は神秘を成り立たせる根拠として存在する。それ故に人はその場所で起きる出来事に神や超常的な存在を感じると考える。怪異空間では怪異にまつわる噂や都市伝説がその場所で怪異現象を引き起こす根拠となるかどうかを調べる。本研究では、聖地から怪異空間へ変遷していく過程で根拠となるハナシはどう変わっていったのかを考察する。後者は、空間のどの要素がそのような状態を生み出すのかを考察する。そこで過去の聖域研究の中からどのような空間的要因で人は聖性を感じるのかを参照しながら空間要素を抽出し、本研究地の空間と比較する。また空間のどのような要素が説話や話の根拠になっているかを実測し、考察する。

1.4 先行研究

本研究に関する先行研究は建築学ではほとんどなく、そのために方法論も含めてほぼオリジナルとなるが、民俗学や人文地理学(現象学的地理学)では、場所論や伝

承論に関連する研究が存在する。ただし、民俗学では、伝承や民話の内容とその背景にある生活を対象としており、地理学では、空間の特質を明確に把握しているわけではない。空間そのものや空間を構成する要素などの研究はまだなされていない。一方、宗教学では、神社、寺など空間がどのような作用で聖地となっているかという研究があり、神社の参道や寺の山門などが聖域としてどのような意味を持つのかを分析しており、本研究にも多くの示唆を与える。本研究では空間を分析の際に先行研究の参道空間の聖性のシステムや宗教空間の囲みの研究などを用いる。

2. 調査地概要

2.1 しとどの窟

本研究の対象地は、神奈川県湯河原に存在する巖窟である。平治の乱に敗れ、伊豆に流された源頼朝は平家打倒のため兵をあげるが、石橋山合戦では自軍の十倍の兵力を有する大庭影親軍に大敗を喫し、わずか7名で山中を逃れる。その時この近辺の領主である土肥実平・遠平父子の案内で巖窟や大牧の洞に隠れ、追っ手を交わした。この巖窟がしとどの窟と呼ばれる。しとどとは小鳥のことであり、頼朝が巖窟に入る際にしとどが飛び立ったことからこの名前が付けられている。

現在は史跡として神奈川県に昭和30年代に登録されている。もとは山伏信仰の霊地で、窟に至る急峻な道沿いにも、数多くの石仏地蔵が並んでいる。



図2 研究対象地広域図

2.2 湯河原の歴史

湯河原は山を背に南は海に面して、魚、貝などの海の幸に恵まれ気候も温暖なので人々の生活に適し、相当古い時代から人々が生活していたと考えられている。プレ縄文時代の石器などが海老山遺跡から出土している。

湯河原付近が土肥郷であることの記述が出てくるのは鎌倉時代に書かれた『吾妻鏡』の記述が最初である。

平安時代末期に入り武士が力を持ち、源氏と平氏の対立がおこり、栄華にふける平氏に不満が高まり諸国の源氏が兵をあげ、その中心が頼朝であった。

頼朝は、圧倒的戦力の前で敗れ山中に逃げ込んだ。大庭軍に追われた頼朝は24日に鍛冶屋之通称「水がくぼ」で対戦し、またも敗れ梶山山中に逃れた。山中に逃れた頼朝は見つからぬよう7人と臥木の大洞（源平衰勢記）や岩窟（吾妻鏡）などに隠れた。

明治時代に入り足柄県の廃止にともない、湯河原各村民政行政区間は神奈川県2大区6小区となる。湯河原は日清戦争で負傷し東京陸軍予備病院に収容された31751人の負傷兵の療養地となる。また日露戦争の負傷兵も湯河原で療養し療養地として全国にひろまった。

また国木田独歩や夏目漱石、芥川龍之介などの著名な小説家が湯河原に宿泊し小説を書き上げている。70～90年代にかけてしとどの窟がある椿ラインは「走り屋」のスポットとして栄えていた。しとどの窟付近も観戦スポットとなっていた。死亡事故なども多発している場所であった。現在では「走り屋」はかつてほど集まっていない。

3. 調査結果

3.1 昔の民話と現在の怪異空間的噂

民話や説話、伝承は文献に載っているものを中心に集めた。しとどの窟のみを扱っている文献は少なく、頼朝関連の書籍が多く頼朝がどのような道筋で追っ手から逃れていたのかを『吾妻鏡』や『源平盛衰記』をもとに考察していくものであった。

また集めた説話や民話からいえることは宗教色が強いものが多く載っており、それらは主に仏教であり、超常的な理由で湯河原温泉を探し当てたものが多い。また民話でも『松ぎらいの箱根権現』など宗教が身近にあったことがうかがえる。湯河原は北に箱根権現があり、西には走湯山の伊豆山権現に囲まれている。天台宗の箱根権現に対し、伊豆山権現は真言宗となっており、湯河原の西に位置する日金山には熊野三山に通じる信仰があるといわれている。このように宗教的に重要な地点に囲まれているということが分かる。源頼朝が伊豆・箱根権現を崇めたことにより、中世においては代表的な霊山であり、修験の場であった。当然しとどの窟やその周辺も明確な記述こそないものの近くの森は修験者の道場として使われていた。信仰がそこに住むものと近くにあったことがこれらの現存する民話や説話から分かる。

インターネットから集めた怪異空間的噂は2000年代前半から存在し、様々なバリエーションがありながら噂を共有している集団は「走り屋」やその道を利用している近所のものが多い。そのため、しとどの窟に行くまでの道である椿ラインやオレンジラインでも同じような怪談

が挙がっている。トンネルでは車で一家心中した4人家族の霊がいるといった話も存在する。

しかし、しとどの窟周辺の道路に関する怪異空間的ハナシは現在ではどのまとめサイトでも見られなくなっている。一部のサイトでは椿ラインは掲載しているがしとどの窟の方がはるかに大きい扱いを受けている。2009年では「首なし地蔵の近くに女性霊がでる」としている話が、2010年代後半では「首なし地蔵を3つ見ると不幸になる、女性霊がでる。」というフォーマットができあがっている。これ以降はハナシが変質していない。

3.2 実際の事件

しとどの窟の怪異空間的な噂では、首なし地蔵と女性の霊、一家心中で車で焼死した家族の霊などがあげられている。首なし地蔵はしとどの窟の地蔵や石仏が安置されていることによって話が成り立っているが、女性霊や家族の霊はしとどの窟という場所が原因となっている訳ではない。その要因となっているのは事件、事故であると考えその関係性を考える。女性が被害者として関連している事故はすべて死体遺棄事件となっている。また未解決も存在するがすべて湯河原町の外から持ち込まれ遺棄されたものである。この女性霊の噂が2010年前後で見られることより、直近の2003年の死体遺棄事件がこの噂に大きく関与していると考えられる。なぜならばこの事件は2002年に遺体が発見され、証拠が少なく捜査に時間がかかっていたため、椿ラインを通る「走り屋」などに情報提供を呼びかけていたことがあったからである。それ故に他の事件に比べ認知度は高いと考えられる。

またトンネル内の一家心中の車で家族4人が焼死した霊の元になっている事件は確認されなかった。朝日新聞と毎日新聞では記述されていない可能性もあるが、似たような事件が間違っって言い伝えられた可能性を検討する。車で焼死する事件は、実際に20年前に起こっており、家族ではないが男性が湯河原町鍛冶屋の空き地で車に乗ったまま焼死している事件が起きている。この事件は新聞での見出しも小さくしか扱われておらず、十分な情報がないため、曖昧な情報が流布していったと考えられる。また、車で死亡するという事件で2007年に自殺サイトで会った男性4人が車で自殺し遺体となって発見されている。これはこの噂での4人の遺体と自殺という点で非常に似ている。噂があいまいな事件の記憶を媒体として、あやふやなまま広がった結果できたものともいえる。

表1 湯河原山中付近死亡事件年表

日付	内容	場所
1985.04.26	事件	箱根ターンパイク
1985.06.11	事件	県道湯河原一仙石原

1988.07.18	事件	湯河原山中
1993.01.07	事件	箱根ターンパイク
1995.02.03	事件	鍛冶屋空き地
1995.09.10	事件	湯河原山中
2000.01.14	事件	湯河原山中
2003.03.08	事件	湯河原山中
2007.12.11	事件	湯河原町吉浜

注記 2019年12月30日現在

4. 空間的特徴

4.1 地理的特徴

土肥相山岩窟が位置しているのは、湯河原と箱根を結ぶ峠に位置しており多くの折り返しが存在する山道である。また標高500m程度の位置にあり、バス停が存在する。その近くに石碑があり、かつてはここで「走り屋」たちや峠を走る人の休憩スペースであった。山伏たちの修行の場であったことから分かるように人が簡単に立ち入れなく、それでいて人を引きつける魅力を持つ場所である。

4.2 アプローチ区間

トンネルを抜けた石仏、石碑がある広場を起点のA地点として、I区間を終点とする。このA区間からI区間までをアプローチ区間と呼ぶことにする。映像で確認すると、少なくとも2009年から首なし地蔵の1つはG区間に存在する。

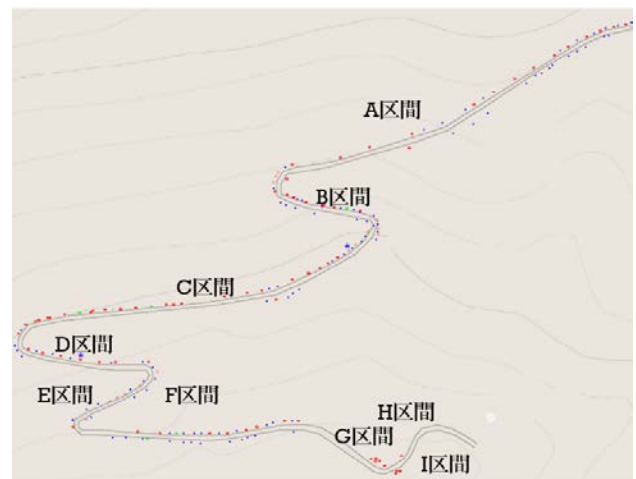


図3 アプローチ区間

アプローチ区間は、しとどの窟という目標に行くまでの道を神社の参道のように変える役割を果たしていると考えられる。神社参道は先行研究でも挙げたように神社自体が俗な空間から切り離されるような空間的工夫がなされている。その工夫は自然や人工物によるものであること示されている。このアプローチ区間はそのような俗世と切り離されるような工夫があり、それによって人々は俗

な世界から切り離されていると感じる。アプローチ区間で神社の聖域性を演出する手法と同じ、対象空間を俗域から区別することや遠くする工夫が用いられている。平面的特徴の聖域との類似点は、多数の折れ曲がり区間が存在し、本来の目的地を最後まで確認できない点や石仏や石灯籠などに囲まれることにより異界性を高めている点にある。立体的特徴の類似点は、緩勾配と急勾配を繰り返している点や急勾配により肉体に負荷を与えるなどの工夫が施され、神社の参道のような役割を持っている点である。

4.3 詳細空間

しとどの窟は標高533.4m、高さ5m、奥行き約17m、幅約10mの岩窟であり、火山活動によってできたといわれている。岩壁からは中心にわき水が出ており、打たせ湯のような水量で落ちてくる。また岩壁全体も水でしめっており、付近の石仏は水に濡れ、苔むした状態で年季を感じさせる。ここには観音像や不動明王、地藏菩薩像などが公式では61体安置されている。2009年はG区間での石仏のみが首がないものになっているだけで、しとどの窟内では首のないものはなかった。2012年は赤い範囲で2体の首なし地藏が見られたが2014年に修復され、首なし地藏はG区間の1体のみとなっている。最新の2019年11月18日の調査では、首なし地藏は4体、首以外も破壊されている（胴から折れている、斜めに欠けている）ものが2体となっている。この際に首がなかったものは2012年に首がなかった地藏と一致する。

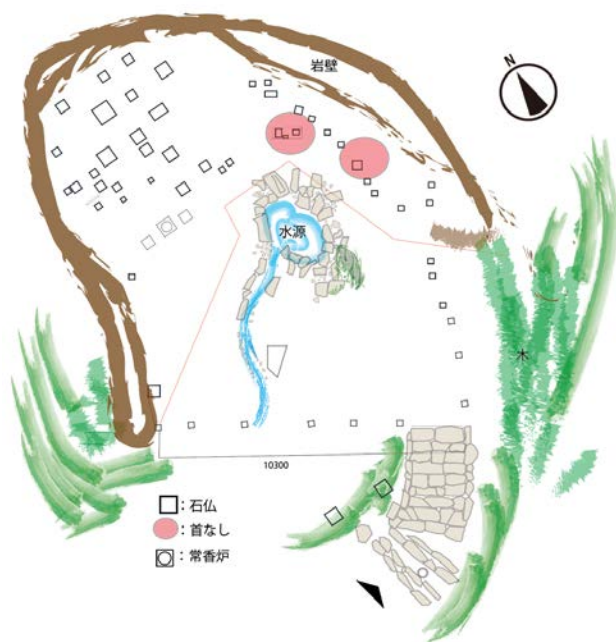


図4 2019年 しとどの窟詳細図

このしとどの窟に至るまで最初に首なし地藏が出てきたのは、G区間である。またその区間から下りだった道が登りに変わることや木々の間を抜けてきたものが岩場

の間を通ることになる。しとどの窟では人は上下左右で何かしらに囲まれる状態になる。それは巖窟の天井であったり、数々の石仏であったり、石灯籠である。また首のない石仏は目立ちやすい台へ安置されていた。

5. おわりに

5.1 考察

神社の参道の聖域性を演出する手法としとどの窟の空間を比較した結果、類似する点が多数見つかった。これらよりしとどの窟に聖地の空間的特徴が備わっていることが分かった。しかし現状はしとどの窟は怪異空間として認知されている。70-80年代の「走り屋」の中で共有された椿ラインのマイナスイメージが、噂の伝承体が「走り屋」から怪異愛好家へと変わるとき、しとどの窟へ変遷していったと考える。そのためしとどの窟では起きていないネガティブな事件の要素を引き継いだ怪異空間的噂となっている。しとどの窟には俗域と異なる空間構成が成されているが、かつては宗教がその説明原理を担っていたが、山伏の信仰や地藏信仰を失ってしまった現在、怪異がその説明原理になったと考えられる。宗教がさほど身近にない現在では、神秘は宗教によって与えられるものではなくなっている。この場所がパワースポットという人もいのように神秘を個人の感覚によって得ることができる時代背景も関係していると考えられる。

5.2 まとめ

今回の調査で聖地の空間構成や神秘的な空間は通常は御利益がある、神様がいらっしゃるといったポジティブなイメージがつけられているが、それらを成り立たせるには根拠となる神話や説話などが必要であることが分かった。聖なるものであるという根拠、つまり神話や説話を失ってしまった空間は、その空間の特異性を説明するために人によって理由付けがなされる。ネガティブな事件や要素があった場合はそれらが組み込まれて怪異空間ができあがってしまう。聖地の空間は俗域とは異なる異界性という点でしか説明できず、人が神聖かどうかを空間で判断できないことが分かった。

参考文献

- 1) ミルチャ・エリアーデ著、風間敏夫訳：『聖と俗- 宗教的なるものの本質について-』、法政大学出版局、1969
- 2) オットー著、久松英二訳：『聖なるもの』、岩波書店、2010
- 3) 海老根聡、他3名：鶴岡八幡宮と江島神社の参道空間における神社の聖域性の演出、日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)1989年
- 4) 上田弓子：現代日本におけるスピリチュアリティについての一考察、教養デザイン研究論集第6号2014
- 5) 伊東龍平著：『ネットローアウェブ時代の「ハナシ」の伝承-』、株式会社青弓社、2016